

明海大学 不動産学部

不動産の不思議

第204回

学生たちの視点と発見

【学生の目】

3年後に開催される「東京2020」に関心があり、施設見学の一環としてお台場から浅草まで水上バスに乗った。地上や地区では確認できない予定地の状況を体験できて有意義であった。

利便性に付け加えるもの

日の出までは新しい埋立地という理由からか、建物は少なく、あっても低層が多い。日の出から浅草までは、頑丈な堤防、橋や高速道路等があらわれ、重厚感にあふれる工造物に囲まれた。堤防のすぐ奥にはマンションがあり、超高層マンションも

立地する。

隅田川を上る途中、船と併走して首都高速6号向島線が延びていた。水上から見るのは初めてで、力強さと交通量の多さに存在意義を感じた。外国人観光客も多い船内から首都高を眺めていて、ある違和感を覚えた。

橋桁の色が違つ箇所が複数あることと受ける、非日常的な雰囲気だ。写真。首都高を利用する時は気付

9号深川線、中央環状線の4線と接続している。延伸工事の工法が様々で統一感を失った可能性もあるが、色は統一できる。

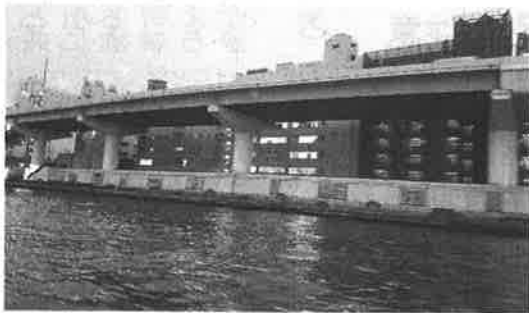
首都高速道路(株)に確認したところ、両国駅付近から隅田川に沿って淡い赤色を塗り替え、淡い青色にする計画の発行中という。淡い青色にする理由は、隅田川の水辺をイメージして景観を損なわないためだが、短期に塗り替えが完了する確証はなく、暫く統一感のない景観が続く。高架道路に必ずしも統一感を求めるものではない。しかし、人間は重

首都高の景観を親しみやすく

かない違和感で、青系や赤系、白系と統一感皆無だ。漠然とはいえず首都高を認識している日本人にも不思議に映る景観を、外国人観光客はどう見ただろう。

経緯を首都高の歴史から考えた。

首都高は1964東京オリンピックの遺産として知られ、次第に延伸した。6号向島線は、同じ71年に開通した7号小松川線を含め都心環状線、



隅田川と首都高6号線の橋脚。水辺のイメージを損なわない塗り替え計画が進行中という

厚感が漂い、環境も悪そうな高架道路には近寄らない。「高架下の可能性」(池羽七海「不動産の不思議第157回」16年11月1日号)でも述べたように、高架道路は人を集め、収益を生む可能性がある。

【教員のコメント】

第二次世界大戦後、夏の五輪を二度開催したのはロンドンだけだ。ロンドン2012では成熟した大会運営と都市再生で成果をあげた。混雑税で車の乗り入れを制限するロンドン中心部に高速道路はない。東京の遺産活用と都市再生が注目される。



池羽 七海
不動産学部4年